

学び合いの中で、中世後期を構造的に関連付けてとらえる子ども

— 中学1年「中世後期の特色をとらえよう」の実践から —

1 単元のねらい

中世後期について、活用できる知識を増やしながら、政治と経済と文化を構造的に関連付けて中世後期をとらえ、中世後期の特色を生徒自らの言葉で語ることができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

次は、1学期の古代の学習を終えたときにある生徒が書いたふりかえりである。

古代は、やはり日本の基礎ができあがってくる時代だと思います。アジアとの結びつきを強めながら、外国から学んだことを取り入れたり、逆にやめたりと、さまざまな実験をしながら律令によって国が動くしくみをつくり、日本が成長した時代だと思いました。 (生徒A)

このふりかえりから、生徒Aは今までの人物史中心の歴史から通史へと変わったこの段階で、事象を関連付けて考え、その時代の特色をつかむことの意義やおもしろさを感じ始めていることが分かる。しかし、古代の学習では、まだ政治史中心の一方的・一面的なとらえでとどまっている生徒が多い。そこで、複数の立場にたって物事を考えたり、事象の因果関係を考えたりする学習を繰り返し行うことによって、生徒のものの見方や考え方を深めていくことが必要だと考える。経済が発展し、民衆の動きが活発になるこの中世後期の学習で「なぜ」「どのようにして」といった、因果関係を問う学習を大切にしながら知識の構造化をはかっているいき、多面的・多角的な社会の見方を培うことが、これからの社会科学習を進めていく上で非常に重要だと考える。

(2) 本単元の内容と社会科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本単元では、中世後期（おもに室町時代）について考えていった。中世後期は激動の時代の始まりであり、その中で幕府や朝廷といった在来の権力や権威は求心力やその輝きを失い、やがて地域国家が分裂する状態に陥っていく。しかし、これらは単に権力者の間でおこった対立ではない。産業の発達や貨幣経済の浸透により成長してきた民衆が、自分たちの利益を追求するために激しい動きを展開していき、その根底からの動きにより政治権力が分散していったといえよう。その混乱の中、様々な利害関係をもつ人々の保護者としての地位を確立していく戦国大名があらわれ、やがて戦国大名の争いを経て、再び日本は統一され、近世の幕開けとなる。本単元では、このような中世後期を、具体的史料から考えることで、活用できる知識を増やしながら、多面的・多角的なものの見方や考え方を培い、最終的には、中世後期の特色についてつかませ、生徒が自らの言葉で中世後期について語れることをねらいとしている。そのためには、知識の習得だけではいけない。知識や、資料を活用し、他者の意見も踏まえながら思考を深め判断し、自分の考えを表現したくなるような学習プロセスがますます重要になってくる。

上記のねらいを達成するために、まずは中世後期の「政治」と「経済・文化」を構造的にとらえる学習を構成した。そして、単元の終末部において室町時代を構造的にとらえた生徒たちに、それまでに習得した知識を用いながら討論することで、結果的に中世後期の特色を総合的につかむことができるような学習問題を取り入れ、学級全体の学び合いの中で、生徒の思考力を高めていきたい

と考えた。

単元終末部の学習問題は「室町幕府の将軍にアドバイスしよう！豊かで安定した国づくり」とし、生徒が室町時代にタイムスリップしたと仮定し、応仁の乱の起きる前夜、各地で起こる一揆や騒乱を前に、為す術の無い将軍足利義政に、豊かで安定した国づくりの策をアドバイスする学習を設定した。政治権力がゆるむ一方で、経済の発達を背景に村を越えて団結した民衆は、堂々と権力者に抵抗し始めた。そのような中世後期を、生徒自らが政治的・経済的な視点から分析し、幕府が安定した権力を維持するために必要なことを考えていった。中世後期に対する認識を深めた生徒は、近世を予想できるようになり、今後の学習につながっていくものとする。

また歴史的分野において、当時に生きる人になりきり「よりよい社会をつくるためには」という視点で考える学習は、現代社会を見る視点にもつながり、ひいては社会参画を促すものとする。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

① 生徒が興味をもつ問題設定と、単元を通して生徒が問題を意識する手だての工夫

思考力・判断力・表現力を高めるためには、いかに生徒に切実感をもって学習に没頭させるかが重要になってくる。そのためには単元の終末部に唐突に学習問題を提示するのではなく、「将軍足利義政にアドバイスをする」という単元終末部の学習問題を、最初に生徒に提示した。そして、室町時代に生徒自身がタイムスリップしたと仮定し、アドバイザーという立場を生徒に最初から与えることで、「将軍にアドバイスをする」という学習問題を常に意識し、幕府の権力維持のために、改善すべき点や発展させるべき点を生徒自らが分析しながら、単元の学習を進めていくようにした。この学習問題のもと、協働で様々な視点から資料を集め、将軍を説得するように策を練り上げる活動は、思考力・判断力・表現力を高めるものとした。

② 2度の学び合いの設定

第3次では、「室町幕府の将軍にアドバイスしよう！豊かで安定した国づくり」という学習問題のもと、2段階に分けて生徒の思考を深めていった。まずは、将軍に国内の事情を分かってもらうため、「政治」「経済・文化」の視点から手紙を書いた。そしてその手紙を、友だち同士で検討しアドバイスし合った。その際、中世後期の本質に迫ることができるような「アドバイスの視点」を、予め生徒に与えて学び合わせることで思考力を深めていった。そして、中世後期への認識が深まったところで、自分たちの考える豊かで安定した国づくり策を考えさせ、再度学び合わせた。社会科部で考える思考力・判断力・表現力を高める2度目の学び合いは、この第3次の5時間目である。班の代表者がアドバイザーとして、将軍に訴える場面を実演することから始まり、各グループの策の根拠を整理し、質問し合いながら中世後期に対する認識を深めていった。今回、最初の場面で将軍にアドバイスする場面を実演する形をとった。将軍に納得してもらうためのシナリオを考え表現することは、自分たちの考えを発表するだけよりも生徒の思考力・判断力・表現力を高めるものとした。この学習では、それまでに習得した中世後期の知識を活用するとともに、中世後期を総合的にとらえさせることになったと考える。

このように学習を展開するにあたり、生徒の思考力・判断力・表現力の高まりを教師がしっかりととらえて指導に生かすことが重要であると考え、二度の学び合い前後に、生徒が作成した手紙やシナリオ、学習のふりかえりを教師が分析し、生徒の力をより確かなものとするはたらきかけを行うとともに、学び合いの有効性を実践を通して検証していくことを試みた。

上記のような評価規準を設定し、今回生徒の認識の深まりと、それに対する学び合いの有効性を詳しく見取るため、もう少し詳細な分析の視点を設定した。今回の分析の視点は、島根大学教育学部特任教授山崎裕二氏の「中学生の歴史的見方・考え方に関する一考察」（昭和59年3月 島根大学教育学部附属中学校 研究紀要第26号）を参考にさせていただいた。山崎裕二氏による、分析の視点は以下の五つである。

| | |
|---------------|--|
| (i) 単層型 | 問題点の指摘などの現状を述べるだけのもの |
| (ii) 二層パラレル型 | 述べられている内容が二つ以上あるが、それらの間に深い意味関係はなく、単に並列的に述べられているもの |
| (iii) 二層システム型 | 述べられている内容が二つ以上あり、それらの内容が関連し合っ て意味をもたせ系統的に述べられているもの 〈例〉現状→原因, 現状→対策, 原因→結果, 条件→事象 |
| (iv) 三層型 | 述べられている内容が三層からなっているもの 〈例〉現状→原因→対策, 原因→結果→解釈 |
| (v) 多層型 | 述べられている内容が多岐にわたり、事象の構造的な把握や総合判断、さらには将来に対する予測などがなされているもの |

この五つのタイプのうち、最も高次なものが(v)であり、最も低次なものが(i)となる。これを上記の評価規準にあてはめたときには、(i)(ii)がC、(iii)がB、(iv)(v)がAとし、学習を進めるなかで、生徒の認識がどのように深まっていくか分析していくこととした。

(2) 将軍足利義政に国内の事情を分かちてもらうための手紙を書こう(第8・9時)

① 授業展開

まずは、個々に手紙を書く。それを班のメンバーで「アドバイスの視点をもって」互いの手紙をアドバイスし合いながら、班でベストだと考える一つの手紙にまとめていくという学び合いを行った。生徒に示したアドバイスの視点は以下の通りである。

| | | | | |
|---|---------------------------------------|--|------------------------------|-----------------------|
| I 国内事情について事実を書いている。アドバイスに期待される内容は以下の五つである。 | | | | |
| ㉑政治 ・守護大名の強大化 ・将軍権力の弱さ | ㉒経済(農村) 農業生産力の向上と 農民達の団結 | ㉓経済(都市) 技術の発達や商工業者の 成長といった産業の発達 | ㉔外国との関わり アジア諸国との貿易 | ㉕文化 庶民文化の形成 |
| II 上記の内容について、事実だけでなく、 <u>原因や結果、あるいはその影響について書いてある。</u> | | | | |
| III 原因や結果、あるいはその影響について、 <u>他の視点(㉑～㉕)と関連付けて書いてある。</u> | | | | |

I→II→IIIにいくにしたがい高次になっていく。そのことを生徒に伝え、「友だちの手紙から素敵なアドバイス(IIやIII)をたくさん見つけ、伝えよう」という中間検討会を行った。アドバイスをすることで、生徒自身の認識を深め、その後、一つの手紙にまとめた。

② 生徒が考えた手紙と考察

以下は1～8班が、将軍義政に国内事情を分かちてもらうために書いた手紙の要点である。なお、それぞれの班が書いた手紙については、紙面の関係上割愛する。

| |
|---|
| 〈1班〉 ㉑新しい技術や肥料の改善による農業生産力の向上 ㉒徳政令を求めの一揆の多発 ㉓守護大の強大化と各地での争いの多発 |
| 〈3班〉 ㉑市の発達や庶民の生活の向上 ㉒農民による一揆や守護大名同士の争い ㉓幕府の資金不足 |
| 〈4班〉 ㉑農民の生産力の向上と団結 ㉒守護大名の強大化と荘園への干涉強化 ㉓勘合貿易による倭寇の衰退 |
| 〈5班〉 ㉑守護大名の強大化 ㉒幕府の財源確保のための新しい税の創設 ㉓明との貿易の活性化 |

| |
|---|
| 〈6班〉 ①一揆による国力の衰退 ②商人の成長と市の発達 ③市の発達による借金をする者の増大 |
| 〈7班〉 ①税の割り当てを変更し、農民からは減らし、守護大名から多く取ることで、一揆を減らし守護大名の力を落とす ②貿易の有効性 |
| 〈8班〉 ①守護大名の強化 ②農民の成長と団結 |

上記は、いずれも述べられている内容は二つ以上あり、現状と原因といった因果関係を述べようと試みているが、事象相互間の関連付けが弱く、二層パラレル型から二層システム型への移行期と見取った。次は、2班の手紙の分析である。

| |
|--|
| 〈2班〉 ①身分の低い者が、高い者に実力でとってかわる下剋上の風潮による將軍権力の危うさ ②幕府の信用と信頼を取り戻すことの重要性 ③そのために西洋や明との貿易の必要性→將軍権力の維持や国内の産業の発展につながる ④幕府が信頼を集めれば、日本独自の貨幣を造ることができる、そうすることでスパイラルに幕府権力の安定と国内の安定を論理的で構造的に述べられており、3層システム型から多層型と考える |
|--|

2班のような現状と原因の因果関係を分析し、その解決策を生徒自らが論理的・構造的に述べることは、この学習の中だけで終わる学びではなく、今後の学習や社会生活も豊かにするものだと考える。よって、他の班でもそのような思考力・判断力・表現力が高まるような学び合いを再度行うことの必要性を感じた。

(3) 將軍足利義政に豊で安定した国づくり策をアドバイスしよう (第10～12時)

以下は、これまでの学習を踏まえて、各班が作成した豊かで安定した国づくり策のうち、三つの班が考えたものと、その分析である。

図2は4班の考えた策である。4班の主張は、①現状の問題点として守護大名の強化と相対的な幕府権力の弱さをあげ、②解決策として成長してきた商人から税を多く取り、幕府の財力と軍事力あげる。③幕府の財力と軍事力があがれば、守護への増税と幕府直轄地を増やすことが可能になり、安定した幕府権力につながる」と述べている。現状→対策→影響を論理的に述べ、政治と経済も関連付けてとらえられていると考える。

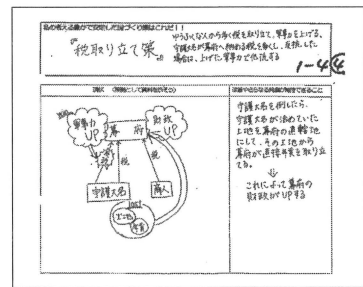


図2：4班の案

図3は5班の考えた策である。5班の主張は、①現状の問題点として守護大名の強化をあげ、②解決策として成長した商人から増税することで財源の安定をはかる。③幕府の日明貿易の特権を守護大名に与えることで幕府の味方を増やすことができると述べている。守護大名支配の対策を考える際に、当時の経済や日明貿易の視点から考えていることは、複数の視点を関連付けながら中世後期をとらえていると考える。

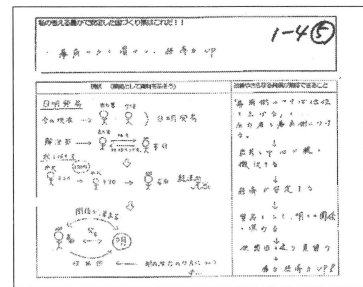


図3：5班の案

図4は8班の考えた策である。8班の主張は、①現状の問題点として、守護大名の強化と農民の成長と団結をあげ、②解決策として、農民への増税と守護大名の領国支配をやめさせる。③農民のゆとりをなくすことで一揆を防ぎ、守護大名も幕府に従わせることができると述べ、現状→対策→影響を論理的に述べている。

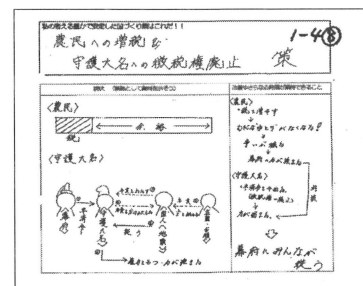


図4：8班の案

これらからも、豊かで安定した国づくり策を考えることで、並列的な認識にとどまっていた生徒が、複数の視点を関連付け構造的に

